

「嘘」からみた地図史

上 杉 和 央

【要約】 「嘘」とは、単なる不正確なものではなく、「意図的にだます」内容を含むものである。そのため、史料に「嘘」を見出す場合、だます側とだまされる側の両者を意識することが不可欠となる。こうした特性を敷衍すると、これまでの地図史研究の多くは地図と作者の関係のみをとらえがちであったという課題を指摘することができる。そこで、作者と読者という関係性に着目した地図史の可能性を論じることがを本稿の目的に設定する。まず、地図における作者と読者の関係は、大きく三つのパターンないし場面に分けることができることを確認し、その後、それぞれのパターンないし場面に関わる事例を提示しながらその特徴を確認し、さらにそこに「嘘」の入り込む余地を検討した。各章では、可能な限り多様なスケール・時期から事例を選択するよう努め、作者と読者、そして地図との関係を焦点化する分析視角が地図史全体に適用可能であることを確認した。

史林 一〇八巻一号 二〇二五年一月

はじめに

地図史ないし地図史研究を「嘘」という視点を導入してとらえ直すとうなるだろうか。それが本稿の問題意識である。もともと、「嘘」は本会の例会テーマとして与えられたものであり、言わば外在的な要因から始まっている点は認めねばならない。ただ、与えられたとはいえ、「嘘」という視点で振り返ると、これまでの地図史研究に不足していた側面に

光を照射できるのではないか、ということに思い至った。地図は現実世界をそのまま反映したものではないという理解、言い換えれば「地図は嘘つきである」という理解は、地図史研究のなかでは、もはや常識の範疇に入ると言ってよい。しかし、そうした常識に安堵し、「嘘」という視点から得られる示唆を正面から扱おうとする姿勢が地図史には乏しかった。こうした点をふまえつつ、以下では、地図史の成果を振り返る中で「嘘」という視点を入れる意義を確認し、その上でいくつかのパターンないし場面ごとに古地図の検討をおこなうことにしたい。

第Ⅰ章 地図史への「嘘」の導入をめぐる

(一) 日本の地図史研究の流れ

現代における地図は、精度の高い測量成果に基づいて一定の範囲の土地を表現したもので、絵画的ないしイメージ的に表現されたようなものとは一線を画すと理解されることが多いように思われる。しかし、観光マップや路線図のように、土地や空間の実態とは大きく齟齬をきたしていても、目的には十分適う（むしろ歪んでいるほうが伝わりやすい）ものを想起すればわかるように、地図の枠組みを精度ないし正確さといった視点で限定するのは、あまり得策ではない。少なくとも、地図史においては、ある一定の範囲の土地ないし空間を表現することを目的に作製された媒体を広く地図と位置づけ、議論の対象としてとらえてきた。本稿においても、こうした幅広い理解のもとで、地図をとらえている。

さて、日本において地図がいつ頃から作製されていたかは不明である。少なくとも八世紀に遡る荘園図が残されており、また同時期には国郡図が作製されていたことも史料より明らかとなる。^②こうした八世紀以降、現代に至るまでに作られた（古）地図について、個別の研究は膨大な蓄積がある一方、その全体の流れを汲み取った地図史研究というのは、意外に少ない。ここでは、各時期に出された通史的な研究のうち、主要な業績について簡単に確認しておこう。

日本図に限定したものではあるが、秋岡武次郎が一九五五年に著した『日本地図史』は、通史的な視点を意識してまとめられた書として画期的であった。^③ 日本図についての基本的な展開が提示されているが、特徴的なのは、秋岡自身が有名な古地図コレクターであったこともあり、自身の所蔵品に加え、他の機関や人物が所蔵する日本図が簡潔に紹介されている点であろう。モノ資料に依拠しての記述は安定感があり、今なお傾聴すべき点は多い。

秋岡の著作以降で、幅広い知識で古今東西の地図史を見通した書としては、織田武雄の『地図の歴史』を外すことはできない。^④ 世界と日本の二部構成で編まれた地図史の概説書であるが、一九七三年の刊行直後から大変な売れ行きとなり、何度も版が重ねられたほか、世界編と日本編とに分けて新書化された。二〇一八年には講談社学術文庫に収められて刊行されるなど、刊行から五〇年を経た現在においても、地図史の基本書としての位置を保ち続けている。

とはいえ、世界と日本の各部のタイトルが「世界の地図とその発達」「日本の地図とその発達」となっていることからわかるように、いわゆる発達史観による記述となっている点には注意が必要である。すなわち、『地図の歴史』では近代の正確な地図をゴールとし、それに向かっていかに地図が「発達」してきたのが表現されることになる。ここに、織田の地図史の限界をみて取ることができる。もともと、古今東西の地図を話題に挙げていることもあり、単純で単線的な発達史の語りになっているわけではない。さらに言えば、地図の機能の一つである土地の把握という側面において、正確性が（近代に限らず、それ以前においても）重視された点は事実であり、それにおいて、正確性の追求という視点から地図史を描くこと自体は否定されるべきものではない点も、心に留めねばならない。

発達史観的な地図史の克服に向かうその後の成果のうち、通史的な視点を有した代表的成果を二点、挙げておきたい。発表順にいけば、一つ目は金田章裕による古地図の時代ごとの変遷を機能と表現対象に注目しながら論じた業績となる。^⑤

金田は、日本における古地図の表現対象は世界・国・小地域の三つのスケールに分けられ、それぞれ一つないし複数の機能が念頭に置かれて作製されることをふまえつつ、対象と機能に照らして地図の歴史の変遷をとらえる視点の有効性を論

じている。そして、どの機能が特徴的に表れるかを地図作製時における政治的・社会的文脈からとらえる文脈論的アプローチを提唱した。金田の文脈論的アプローチは、後に古代荘園図を中心とする議論で深化され、地図史の通覧的叙述においても活かされることになった。^⑦

一方、応地利明は『世界地図』の誕生」のなかで、地図に「傑作」という評価が成り立つとすれば、それはどのような地図かという問いを設定した上で、古今東西の多様な世界図（世界地図）を論じている。^⑧その内容を詳しく紹介する余裕はないが、そこでの応地の立場は、「進化」史観による地図発達史だけの地図史は「やせ細ったものでしかない」というものであった。そして、「進化」史観の評価基準とは異なる基準として、「歴史をつうじて地図がになってきた社会での役割をもとに評価基準を設定する必要」を説き、その基準をふまえた「傑作」論を展開したのである。

金田の議論と応地の議論は、対象とする古地図も、古地図の分析視角も大きく違うものの、いずれも単線的な発達史のみでとらえる地図史からの脱却を図ろうとした点、そしていずれも社会と地図との関係性を重視する方向にその可能性を見出している点においては一致するものであった。このような方向は、地球儀の作製・移動・利用を幅広い視野でとらえた千田稔の『地球儀の社会史』^⑩でも明示されており、地図や地球儀といった地理的知識を表現する媒体は社会から遊離した存在ではあり得ないという理解は、現在の地図史研究のなかで十分に共有されたものとなっている。

（二）「嘘」という視点からみた社会と地図の関係性

発達史観を相対化するなかで社会と地図との関係性が強く意識されるようになったわけだが、こうした到達点をふまえただで「嘘」という視点から地図史研究をとらえ直すと、どのような課題を新たに提示しうるだろうか。

まず、「嘘」とは何か、という点から始める必要がある。といっても、地図史や歴史地理学において「嘘」が明確に定義されたことはない。そのため、ひとまず心理学の事典に依拠してみると、「うそ」^⑪ 意図的にだます陳述をさし、

たんなる不正確な陳述とは異なる」^⑪と定義されている。簡潔な内容ではあるが、この定義は社会と地図との関係を考えるにあたり、二つの示唆を与えてくれているように思われる。

まず、だます意図を持たない誤りは嘘ではないという点である。古地図に当てはめれば、不正確な内容であってもそれが即、嘘の地図というわけではない、ということになるだろうか。古地図において、不正確さは大きく三つの点に表れる。まずは、大地との対応関係が不正確といった場合であり、まさに発達史的な理解からすれば、この種の不正確さは時代を経るごとに少なくなる。次に、大地の上で展開する人間や自然の営為の描写に対する不正確さであり、地図の主題に関わることも多い。これは基本的に地図に関わる人びとの経験世界の内部を対象とするが、三つめとして、世界図のように経験世界の外部を含む範囲を表現する際に表れる不正確さもある。この場合、想像力が大きく関係した描写となる。経験世界の内部と外部が同時に描写されることもあるが、応地が明快に論じたように、例えば中世の世界図などは「経験と現実」の延長上に「観念と妄想」があるのではなく、「観念と妄想」のなかに「経験と現実」を位置づける営みとしてとらえられる。^⑫この営みは経験世界の内部についても「観念と妄想」に応じて彩ることにつながる。そこに現実空間を正確に表現しようとする意識は乏しい。すなわち、そこでは正確か不正確かという評価軸そのものが意味を成さなくなる。発達史的な視点が地図史の一部しかとらえ得ない所以である。

いずれにしても、定義に照らして判断すべきは、地図の誤りや不正確さにだます意図が含まれているかどうかという点になるが、これこそ、社会と地図との関係を考えるもう一つの示唆となる。「意図的にだます」というなかには、だます（だまそうとする）人物・集団と、だまされる（だまそうとされる）人物・集団がいる。地図で言えば、それは作者と読者ということになる。すなわち、「嘘」という視点を導入すれば、作者と読者が地図を介して関係性を有することに対して敏感にならざるを得ないわけである。こうした関係性を含みこむ形で成立するのが、これまで述べてきたような「社会」に当たるわけだが、地図の作製現場においては、「社会と地図」といった漠然とした関係ではなく、もつと明確に作者―読

者の関係性が想定されることになる。

こうした点をふまえると、発達史観の相対化として登場した「社会と地図の関係」という指摘は、有効であるものの曖昧な側面が残りのこと、とりわけ作者と読者との関係といった側面で先鋭さを欠くものとなっていることがわかる。「嘘」という刺激的な視点の導入は、こうした地図史の全体的な動きそのものについての一定の評価と課題の抽出とをもたらすものとなるのである。

なお、前段では「人物・集団」と表現した。作者側も読者側も一人であるとは限らず、複数になることを意識したものであるが、だまされるのが「社会」すべての人びととなる場合も理念的には想定しうるだろう。以下では「人物」などと表記するが、とりわけ読者側の広がりについては留意せねばならない。

(三) 作者と読者の関係

地図を介した作者と読者の関係には、いくつかのパターンないし場面が設定できる。

一つ目は、作者と作者が想定していた読者によって関係が取り結ばれるパターンないし場面があるだろう。こうした読者を読者①と表記する。読者①は、作者にとって枠づけられた特定の人物ないし集団である。そして、地図に表現された内容は作者と読者①の両者の利害関係に関わるものであることが多い。もちろん、直接的な利害だけでなく、作者が一方的に考える利害関係、例えば知の提供やそれを通じた影響力の行使といったことも含まれる。

次に、作者が「不特定多数」のために地図を作製しているパターンないし場面というものもあるだろう。こうした読者を読者②とする。作者と読者①が何らかの環境を共有しているのに対し、作者と読者②にはそうした環境の共有が乏しく、関係が希薄である。少なくとも作者にとって、そのように感じるのが読者②である。

ここで、先ほどの「社会」を持ち出そう。地図に関する何らかの環境の共有が乏しくとも、作者と読者②が同じ「社

会」に属しているということは、十分に想定可能である。その意味で、「不特定多数」と言っても一定の枠組みが想定されていることは多い。例えば、出版図の場合、「不特定多数」に向けて販売されただろうが、内容に応じた主たる購買層は当然、想定されたはずである。

一方で、作者の「不特定多数」の想定すら超える範疇の読者②が生まれる場合もある。地図がたびたび作者の手から離れば、作者が地図の読者を限定することはできないからである。例えば、作者が読者①に対して作製した地図について、読者①が知り合いにみせるような場面だったり、出版図が作者の想定した以外の購買層の目に触れる場面だったり、そうした場面は簡単に想起できる。作者の思惑を超えた読者②が地図を手にすることは、意外に多いのかもしれない。

また、作者と読者②が異なる「社会」に属していることもまた大いにありうることである。このもつともよい事例は、地図史研究そのものである。地図史に取り組む我々は、地図の作者が生きた時代や場所、ないし地図が作られ利用されていた時代や場所と違う時空に生きていることがほとんどである。異なる時代・場所に作られ、利用されていた地図を「古地図」とみなし、吟味していくのである。その過程で、地図の表現に事実と異なる内容を見出し、痛烈に指摘することもあるだろう。こうした指摘は、作者にとっておそらく青天の霹靂であり、また実際のところ、異なる時間・場所に住んでいた作者には、我々の指摘は届かない。

このようにみてくると、作者と読者①との関係が、作者から読者に向けられたベクトルが関係性の出発点となるのに対し、作者と読者②、とりわけ、異なる「社会」の読者②との関係の場合、作者からではなく読者から地図、そして地図を介して作者に向けられたベクトルによって関係性が（疑似）構築される。地図を介した作者と読者を概観すれば、ひとまずこのように整理することができる。

ただし、こうしたベクトルで整理していくと、もう一つの状況が浮かび上がる。それは作者と読者という構図が成立しない場合、すなわち、作者が誰にみせることも想定せず、自分自身のためだけに地図を作製した場合である。「作者⇨読

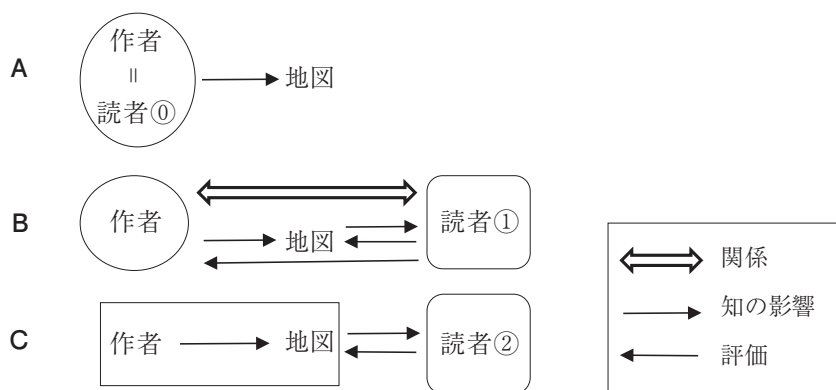


図1 作者・地図・読者の関係性の模式図

者①」でも表現できようか。実際のところ、こうした地図も、作者以外の誰かに発見され、みられることになって初めて話題の俎上に上がるため、その時点では読者②が存在しうることになるのだが、下書きなどのように、作製時点において読者が想定されていない地図は確かに存在する。

こうしたパターンないし場面を模式的に示したのが図1である。これまでの地図史において、作者・地図・読者の関係性が整理されたことはなく、これらの整理に基づいて地図史の検討を進めることは一定の意義があるだろう。そのためには、特定の時期に限定するよりも、日本における地図史の全体を見渡すような行論が必要となる。

付言しておく、作者については、地図を描こうとした者と実際に作図した者とが異なる場合がある。例えば領主に提出された近世村絵図は、その村ないし記銘された庄屋（等）を作者として措定しうるが、実際の作図は別の者であることは十分に想定可能である。依頼主と絵師（図師）といった関係においても、依頼主の注文の質や量によっては絵師（図師）は代弁者に過ぎないといった状況にもなるだろう。こうした点にも留意しつつ、本稿においては、作製時に地図内容にもっとも意思ないし意図を込めた人物を作者と位置づけて論を進めることにしたい。

以下の章では、図1のAからCについて、異なる時代、異なる表現スケールとなる具体例をいくつか取り上げていき、そのなかで作者と読者の関係、

そして地図の位置づけを確認し、さらに「嘘」の生じうる状況を確認していきたい。ただし、近代の事例については紙幅の都合で取り上げることができなかった。また、本稿の目的は個別の地図の追究ではないため、地図の内容に関する分析そのものは、基本的には筆者がこれまでにおこなった調査や先行研究の成果に依拠した上で論を進めることにしたい。

- ① 金田章裕ほか編『日本古代荘園図』（東京大学出版会、一九九六年）
- ② 『続日本紀』天平一〇年（七三八）八月辛卯条に「令天下諸国造国郡図進」とあり、また『日本後紀』延暦一五年（七九六）八月己卯条に「是日。勅。諸国地図。事迹疎略。加以年序已久。文字闕逸。宜更令作之。夫郡国郷邑。駅道遠近。名山大川。形体広狭。具録無漏焉」とある。
- ③ 秋岡武次郎『日本地図史』（河出書房、一九五五年）。
- ④ 織田武雄『地図の歴史』（講談社、一九七三年）。
- ⑤ 金田章裕「絵図・地図と歴史学」、『岩波講座 日本通史 別巻三』（岩波書店、一九九五年）。
- ⑥ 金田章裕『古代荘園図と景観』（東京大学出版会、一九九八年）。
- ⑦ 金田章裕・上杉和央『日本地図史』（吉川弘文館、二〇一二年）。
- ⑧ 応地利明『「世界地図」の誕生』（日本経済新聞出版社、二〇〇七年）。
- ⑨ 前掲第一章⑧ 応地二〇〇七年、二六四―二六六頁。
- ⑩ 千田稔『地球儀の社会史―愛しくも、物憂げな球体』（ナカニシヤ出版、二〇〇五年）。
- ⑪ 中島義明ほか編『心理学辞典』（有斐閣、二〇〇三年）、五六頁。
- ⑫ 前掲第一章⑧ 応地二〇〇七年、三六―三九頁。
- ⑬ 近代の地図の事例として、吉田初三郎の鳥瞰図の記載内容を下記で議論したことがあるため、参照していただきたい。a 上杉和央「吉田初三郎の描いた昭和初期の京都」、上杉和央・加藤政洋編『地図で楽しむ京都の近代』（風媒社、二〇一九年）。b 上杉和央『軍港都市の一五〇年―横須賀・呉・佐世保・舞鶴』（吉川弘文館、二〇一二年）。

第Ⅱ章 読者不在の地図

（一） 知のインプット

応地の表現に従えば、地図には、「経験と現実」からなる経験世界の内部と「観念と仮想」による経験世界の外部の両方が表現されることになる。図1のAのように、作者が読者を想定せずに地図を描く場合としては、経験世界の内部に関するメモやスケッチをおこなう場合、自己の領域の確認をする場合、公表用の地図の下書きや控えの作製といった場合、

経験世界の外部を自分だけで想像／創造する場合、既存の地図を模写して手元に置く場合などが想定できる。経験世界の内側については、自己が経験した範囲で得られた地理情報を自己の中にインプットし、知として練り上げる過程で、こうした地図は現れる。一方、経験世界の外側については、地理情報というよりも地理的想像力を駆使して空間を平面的に実体化させる工程で地図が生まれる。

こうした状況は、あらゆる時代に作られうるが、史資料一般の残存状況からしても、古代や中世において、明確に読者不在と位置づけられる地図資料は残されていない。例えば、現存する古代荘園図のうち、天平七年（七三五）の年紀が表現された「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は、平安時代後期の写本であることが判明している。^②原図は所領を主張するためのものであり、明確な読者が想定されて作製されていたが、写された段階では所領の確認が主たる目的であり、資料保存・保管用として写されたと思われる。写本作製の際、所領の増加等をもくろみ、原図の記載内容の変更などが実施されたのであれば、それは見せるべき読者を想定した変更（改ざん）となるため、図1のBの範疇となるが、本資料は奈良時代の原図をよく伝えるものと評価されており、そうした変更はなかったとみられる。その場合、この写本は、自己のために作製されたAの地図として、位置づけられるだろう。とはいえ、いつか所領を主張するために備えての写本作製ということであればCになる。いずれにしても、現存する古代や中世の地図は、所領などの権利を後世にわたって示すために作られ、実際に残されてきたものだと言え、そこに読者が想定されていなかった、と言い切るのは難しい。

こうした状況に対し、近世以降に作られた地図には、自己の手控えとして作られたようなものも認められる。例えば図2の「改製日本分里図」と図3の「南部津軽図」は、安永九年（一七八〇）に刊行された『改正日本輿地路程全図』の作者として知られる長久保赤水（一七一七—一八〇二）に関わる資料群に含まれる図である。^③これらの図については、以前、『改正日本輿地路程全図』を作製する過程で作製されたものであることを指摘したことがある。^④その要点を示せば、明和五年（一七六八）の年紀が記された貼紙が付された「改製日本分里図」は、『改正日本輿地路程全図』の完成に向けた取り



図2 改製日本分里図

長久保赤水作、明和5年（1768）、高萩市歴史民俗資料館所蔵（長久保甫氏寄贈）



図3 南部津軽図

長久保赤水作、安永5年（1776）か、高萩市歴史民俗資料館所蔵（長久保甫氏寄贈）

組みのなかで、正確さを追い求めた赤水の思索の足跡が確認できる図となっている。「南部津軽図」には「永永（ママ）五年十月十三日津軽黒石ノ千箇寺ニ逢而記スル所」とあり、「永永」が「安永」の誤記とすれば、安永五年（一七七六）となり、「改製日本分里図」よりも後、『改正日本輿地路程全図』の刊行前に作られたものと位置づけられる。それは三図に記載される情報の比較からも妥当である。赤水は特に津軽半島に大きな関心を寄せ、『改正日本輿地路程全図』刊行後もその形状を大きく改訂したことが知られるが、この「南部津軽図」は、『改正日本輿地路程全図』の作製にあたり、津軽半島付近の情報に関する典拠の一つとして使われた可能性が高い。

本稿の論点から確認したいのは、「改製日本分里図」も「南部津軽図」も、本来、赤水が自身の地図作製過程で作ったものであり、他人の目を意識して作ったものではない、という点である。「改製日本分里図」の地理情報には、胡粉や貼紙による修正が各所でみられる。修正以前の情報に対して、赤水自身がより適切と思われる情報に更新していったことになるが、当然ながら、そこに「意図的にだます」ような思惑や、「嘘」として糾弾しようとする姿勢などを見出すのは、不合理な態度である。

一方、「南部津軽図」の明瞭な年号表記ミスについては、手が加えられた形跡はない。自身が理解できていれば問題ないのであり、そこに他人の目線が意識されていないのは明らかだろう。もちろん、こうした表記ミスについても、「意図的にだます」要素を見出すことはできない。

（二） 想像／創造の賜物

自己の満足のために、経験世界の外部を表現しようとした地図、言わば趣味の空想図といったものも、図1のAの範疇に含まれる。ただ、本当に自己満足のためだけに作ったのかを適切に評価するのは難しく、その意味で事例を抽出するのは困難をきわめる。そうしたなかで、図4の「端原氏城下絵図」^⑥は、自己の想像世界を地図に表現することに力点が置か

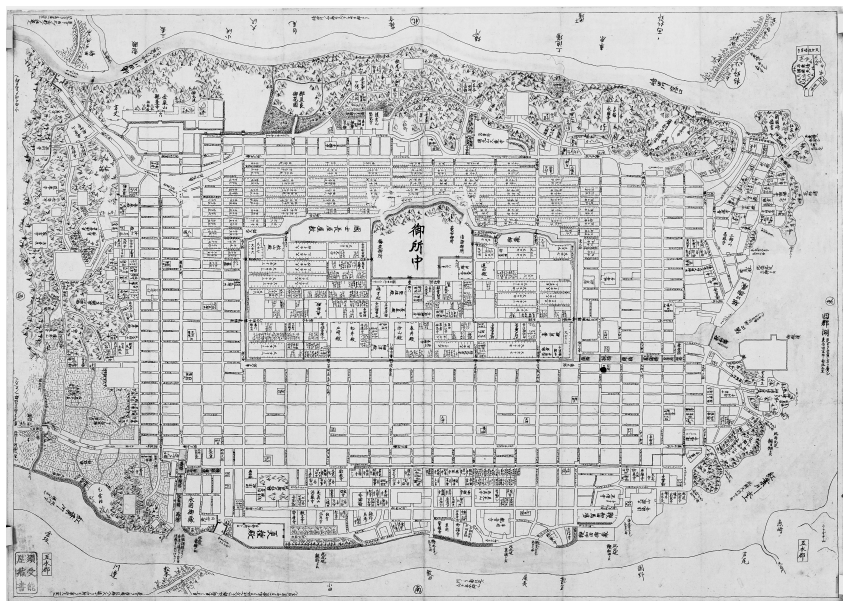


図4 端原氏城下絵図

小津栄貞作、延享5年（1748）、本居宜長記念館蔵

れ、かつ、基本的には他人にみせることはなかっただろうと想定できる珍しい資料である。

作者は伊勢国松坂に住んだ小津栄貞（一七三〇—一八〇二）で、この図は栄貞が一九歳だった延享五年（一七四八）に手掛けられた。本図の内容は別稿で指摘した通りであり、^⑦詳細は省くが、端原宣政なる架空の領主が収められている都市がきわめて詳細な地理情報を伴って表現されている。もちろん都市それ自体も架空で、栄貞の住む松坂や、栄貞の憧憬した京都の都市構造に範をとりつつ、都市が生成されている。

栄貞は、「端原氏城下絵図」の内容に深く関わる端原氏やその家族、家臣に関わる架空の系図（「端原氏系図」^⑧）も作り上げており、時間軸と空間軸の両方にわたって端原氏の世界を想像／創造していた。一介の町人でかつ弱冠一九歳の栄貞が、この時間と空間の「図」（系図・地図）を世に問うと考えていたとは想定できず、まずもって自身を満足させるための作製であったとみてよい。^⑨地理的想像力を駆使して経験世界の外部（文字通り想像の世界）を示したこの図は、確かに

多分に「意図」が含まれるが、それは作者であり読者（読者⑩）である自分自身の知的好奇心を満足させようという意図であり、そこに「だます」といった側面は皆無である。もちろん、家族などのごく近い者に披露した可能性は否定できないが、それは創作物の披露が目的であり、想像／創造の賜物であることを自慢することはあっても、それを隠して「だます」ようなことはなかったはずである。

ただし、この図が結果的に「嘘」をつくことになった歴史があることも付言しておきたい。栄貞自身は、この地図に名称を与えてはならず、地図自体にタイトルらしきものは記されていない。そのような中、現代となり、資料整理・目録化作業がおこなわれた際、この地図に「洛中洛外の図」というタイトルが付された。この図を京都図の一種とみなしたわけである。栄貞は決して「嘘」をつこうとはしていなかったが、栄貞の想定していなかった後代の者は、その描写された都市の内容に、ある意味でだまされてしまったことになる。すなわち、「端原氏城下絵図」は、図1のAのみならず、Cの事例としても位置づけることができる。

- ① 前掲第1章⑧ 応地二〇七年、三六―三九頁。
- ② 石上英一『古代荘園史料の基礎的研究 上』（塙書房、一九九七年）。
- ③ 「改製日本分里図」「南部津軽図」は高森市歴史民俗資料館所蔵（長久保甫氏寄贈）である。なお、これらを含めた長久保赤水関係資料は、二〇二〇年九月三〇日に国の重要文化財に指定された。
- ④ 上杉和央・豊田智美「長久保赤水旧蔵史料についての検討―赤水日本図の作製過程の解明に向けて―」、『財団法人国土地理協会第九回學術研究助成研究成果報告書』（国土地理協会、二〇一〇年）。
- ⑤ 海野一隆「藤原貞幹の日本図の原拠」、『東洋地理学史研究 日本篇』（清文堂出版、二〇〇五年）（初出、『古地図研究』三一―、二〇〇三年）。
- ⑥ 本居宣長記念館蔵。
- ⑦ a 上杉和央「端原氏城下絵図」について、『鈴屋学会報』一九、二〇〇二年、b 上杉和央「江戸知識人と地図」（京都大学学術出版会、二〇一〇年）。
- ⑧ 本居宣長記念館蔵。
- ⑨ 栄貞が端原氏に関する「物語」を生成しようとしていた可能性については、賛否それぞれの見解が提示されている。前掲第II章⑦a 上杉二〇〇二年。
- ⑩ 北岡四良・岡本勝編『本居宣長記念館 蔵書目録（二）』（松阪市教育委員会、一九七七年）。

第三章 読者の明確な地図

（一） 作者・読者・地図

前章で取り上げたAの事例に対して、本章で取り上げるのはBの事例、すなわち読者（図1での読者①）が想定されて作られた地図である。Bの構図においては、作者と読者の権力を伴う関係性（政治性）によって、いくつかのパターンないし場面が想定できる。

一つ目は、作者が特定の相手（読者①）に対して伝えたい情報や意思があり、それを地図という媒体を介して伝える場合である。地図をめぐる作者と読者の関係性という点でみれば、あきらかに作者に主導権があり、作者は能動的に地図を作り、一方の読者は、作者によって作製された地図を受動的に享受することになる。もっとも、作者と読者の関係の不均衡さの度合いは多様であり、作者が強い意志を持って地図内で「主張」することもあれば、作者自身が自覚的でないままに読者に「教示」することもあっただろう。こうしたパターンないし場面を〔B-1〕としておく。

二つ目は、むしろ読者側に主導権がある場合であり、〔B-2〕と表記する。わかりやすいのは領主によって領域の地図の作製が村の庄屋などに命じられるといった状況だろう。ここで言う読者とは、地図の作製を「指示」ないし「依頼」する主体であり、作者はそのオーダーに従って、読者（依頼主）の目的に合う地図の作製に取り組む。この場合、読者（依頼主）と作者は、領主と領民といったまさに生活圏に存する権力関係のなかでとらえられる関係の場合もあれば、雇い主と図師・絵師のように一時的ないし恒常的な雇用―非雇用の構図でとらえられる関係もある。前者であれば、読者（依頼主）が地図の作製に関して権力を持って「指示」するが、後者の場合、例えば著名な絵師・図師に依頼して図を作る、もしくは図の内容に権威をまとうせるために作者を選定するといったことを読者（依頼主）が想定して「依頼」する

ならば、読者（依頼主）と作者の関係は前者のそれとはずいぶん異なるものとなる。やはり〔B-2〕も多様性の幅は広いという点は確認せねばならない。

三つ目は、作者と読者の役割分担が相互流入しているような状況、すなわち地図の作製に、作者だけでなく読み手である読者も参加し、両者の意図や意思が地図に表現される場合である。こうしたパターンないし場面を〔B-3〕としておきたい。もっともわかりやすいのは、特定の土地に関わる相論、ないし相互の主張の調整に際して地図が作られる場合であろう。地図の内容に何らかの利害を有する者たちが地図を作製するのであり、利害に関して対抗的な立場ながら（立場だからこそ）、地図作製においては（緊張感を伴った）協調的な関係となる。

作者と読者の関係性から地図作製をとらえると、こうした三つのパターンないし場面を想定可能だが、これらは決して独立した領域を構成するわけではない。例えば、〔B-3〕に含みうる利害調整のための作図は、関係者の発案である場合のほか、判定を実施する第三者の指図によって作製が指示されることもある。当然、その第三者は判定材料もしくは判定結果の表示として地図を欲している。つまり、こうした場合、土地に対する当事者である作者と読者という〔B-3〕の関係と同時に、当事者と判定者という意味での〔B-2〕の関係も同時に表れることになる。また、〔B-1〕のようなパターンで作られた地図に対して、読者が内容表現に関わりを持つことで〔B-3〕へと変化するといったことも、十分に想定できるだろう。一つの地図における作者と読者という位置づけは、決して所与のものではない。

（二） 作者による主張

前節で確認したように、Bの各パターンないし場面は、往々にして独立的なものとはならない。その点を確認したうえで〔B-1〕の典型例を示すとなると、例えば被災状況を伝える地図が当てはまるだろう。事例として図5を掲げておく。図5は、江戸時代に描かれた「山城国綴喜郡大住村絵図」^①である。大住村は木津川左岸に位置し、図5においては画面下



図5 山城国綴喜郡大住村絵図

江戸時代後期、精華町寄託（森島國男家文書）

側（東側）に木津川の流れが群青色で表現されている。この図に作製主体や宛先についての情報は付されていないが、相給村であった大住村のなかに所領を有していた旗本天野氏の上方代官職にあった森島家に伝来してきたことから、大住村から天野氏（の代官である森島氏）に提出された図とみてよい。

この図の注目すべき点は、図内、木津川下流部（図5では画面下やや右）に「此朱引切所式百五拾間」とあり、破堤箇所が太朱線で示されている点である。そこから南西（図5では左上）方向、そして途中からは北（図5では右）に方向を変える形で、河川と同じ藍色で流路が記される。その下には田畑の小字的地名が記されており、洪水の流路であることは疑いない。さらに、この図には別の二本の朱線があり、破堤箇所から遠い線には「此朱引之内水先」、近い線には「此朱引分北高拙」とあり、洪水により浸水した範囲と、農作物の被害の深刻な範囲が表現されている。すなわち、この図は洪水による農作物被害を領主である天野氏に訴えることに主眼を持って作られたものである。

図内に洪水の発生時期を示す記載はない。それは作者側（大住村）と読者側（天野氏（森島氏））が、洪水に関する情報を共有していたからであり、図内に表現する必要がなかったからだと考えてよい。もつとも、こうした訴えが地図のみでなされたとは想定しがたく、地図と一緒に被害や減免を訴える内容の文書があった可能性が高い。その場合、そちらに年月日などの情報が記載されていたのだろう。その意味で、この地図の役割は、被害の空間的な広がりを示すことにあった。

洪水が特定できないため、^②図の内容についてこれ以上立ち入ることは難しいのだが、あえてこの図に「嘘」の入り込む余地の有無を確認すれば、それはある、ということになる。減免等際に際して有利な条件を獲得することが目的であれば、洪水の主水路（図中、藍色で表現）や被害範囲（朱色で表現）は、少しでも広くみせるといった誇張が施された可能性はあるだろう。藍色の洪水水路は木津川と比べて激しい筆致で表現されている。こうした表現もまた、読者たる領主に対する被害の主張に効果を及ぼした可能性もある。これらは作者から読者への無機質な報告ではなく、作者の思いのこもった「情」報としてとらえねばならない。事実に照らした上での「嘘」かどうかの判定も重要だが、こうした「情」報を史料から読み取ることもまた重要だろう。もちろん、この「情」報の本来の受け取り手である読者（ここでは天野氏（森島氏））がどう受け取ったかは、また別の問題である。

〔B-1〕に関わる別の例として、中世の世界図を挙げておこう。日本で確認できるもつとも古い世界図は仏教系世界図であり、法隆寺蔵「五天竺図」がそれに当たる。この図をめぐることは、これまで多様な議論がなされてきたが、^③横内裕人によれば、作製時期や作製者に関する議論については、貞治三年（一三六四）に法隆寺重懷が図画したというのが現時点での大方の共通理解であるという。^④この図をめぐる議論そのものの詳細に立ち入る余裕はないが、本稿のテーマに引き付けたとき、この図が中国や朝鮮半島からもたらされた原図の単なる模写ではなく、補陀落浄土信仰など、当時の日本に展開していた信仰世界ないし仏教的世界観に基づいた追記ないし変更がなされ、中世日本ならではの仏教系世界図となっていることが明らかにされてきた点は、大変興味深い。横内の言葉に従えば、「伝統的テーマ」に「新たなテーマ」が組み込

まいたのが「五天竺図」だということになる。^⑤

当然ながら、追加される内容には作者の主張が含まれる。まさに主題と言って差し支えない点である。重懷本人が「新たな主題」を挿入して図を作ったのか、こうした作業は別の者により、その原図に重懷が依拠したのかといった点は、さらなる吟味が必要かもしれないが、たとえ後者としても、本図の作者の作製意図のなかに、「伝統的主题」と「新たな主題」が総合された仏教的世界を可視的に現出させ、読者と共有することが含まれた点は、おそらく揺るがない。ここでの読者とは、作者と同じ環境、すなわち南都仏教の宗教的社会にいる者たちと措定してよいだろう。^⑥

「五天竺図」は、その後の仏教系世界図に影響を及ぼす存在となったことが知られるが、その後の作品においては（においても）、その時代の世界像や宗教的觀念に応じた変更がなされる。そうした変更は、「五天竺図」の模写本と目されるものにおいても確認できることである。横内は、「五天竺図」における「新たな主題」の一つである補陀落淨土信仰にかかると補陀落山の表現について、「五天竺図」と江戸時代の模本との表現の違いを検討し、中世における補陀落山が「此土の淨土」として認識されていたが、近世には死去してたどり着ける「彼岸の淨土」へと変化したことを読み取っている。^⑦これは、「五天竺図」に示された「新たな主題」の表現は、客観的で普遍的なものではなく、作者の意図が刻み込まれた主観的なものであったことを物語る。

もちろん、作者と同じような知的環境に身を置いていた「五天竺図」の読者であれば、作者の意図を含む主観的な表現に対して共感し、主観的な意味で「正しい」ものとして受け入れられた可能性は大にある。だからこそ、その後に影響を及ぼす指標的な作品としての地位を獲得し得たのだろう。ただし、同時代の仏教社会における知的環境が一樣であったとみなすべきではない。例えば、「伝統的主题」には馴染んでいても、「新たな主題」については作者とは別の考えを持つような者もいたかもしれない。そうした者からみれば、「五天竺図」に表現された作者の意図には「嘘」が込められている、ということになる。「B-1」の場合、作者がだます意図はなかったとしても、読者側が作者の「主張」に対して反



図6 山城国相楽郡和束山之莊大宮山林絵図（部分）
江戸時代後期、相楽東部広域連合蔵

発や違和感を抱くことはありうる。

さて、「B-1」の事例として、指摘しないわけにはいかない近世の地図群がある。樗井文書と総称されている一連の史料に含まれる「古図」である。樗井文書については、馬部隆弘による明晰な検討によって、樗井政隆によって創造的かつ戦略的に作られた神社や地域の由緒や歴史を説明する記録や地図・境内図であることが確定的となっている。⑧これらが政隆の個人的な知的好奇心の範囲に収まるのであれば、史実と異なる内容が表現されていたとしても、それはAに属する活動となる。一方、そうした地図類が、それに関わる地域や集団に対して供与されていくとき、そしてとりわけ、それらが地域や集団の何らかの利益に資する内容を含むとき、政隆は読者を想定した、すなわち「B-1」に含まれるかたちでの創作をおこなっていたこととなる。創作の内容を担保する「史料」も準備するなど、その営為は周到であった。また、馬部によって「模写に模写を重ねたことによって、紙や絵の具が新しいにもかかわらず、内容そのものは古いと主張したのである。これは樗井政隆の常套手段」⑩と評されているとおり、原図を模写した体裁をとるなどの試みをおこなっている（図6参照）。もっとも後述のように、こうした粉飾は江戸時代に作製された古図全般にみられる常套手段でもある。



図7 目黒山形
寛文5年（1665）、松野町立目黒ふるさと館所蔵

（三） 読者の指示による地図

読者側の指示によって作者が作図する〔B-2〕のパターンないし場面の事例にうつろう。初期の洛中洛外図屏風や世
界図・日本図屏風などのように、注文主が絵師・図師に依頼する場合などはその典型である。^⑪これらにおいて、作者は読
者（注文主）の要望に応じて内容を仕上げていくことになる。

また、読者側が作者側に地図作製を命じる場面の一つに、裁判における資料提出がある。例えば江戸時代、所領の異なる集団どうしの相論は江戸の評定所にて裁かれたが、土地をめぐる相論については、その過程で当該地に関する地図等の提出が命じられることがあった。相論地を実見しえない評定所役人にとって、こうした資料は論点を適切に理解する上でも必要なものであったのだろう。そのため、時に平面の地図だけでなく、立体模型を作製させることもあったことが知られる。

図7に示した目黒山形も、そうした立体模型の一つである。これは、明暦四年（一六五八）に起きた伊予国吉田藩領目黒村と宇和島藩領次郎丸村による山論に関係する史料で、寛文四年（一六六四）に目黒村が幕府に提訴、争いの舞台が江戸に移された際、評定所より当該地の立会絵図と山形の提出が命じられたことが作製の契機となっている。^⑫

目黒山形の作製にあたっては、現地の測量が実施され、表面の仕上げに際しては土地利用が塗り分けられるなど、現地の様子を再現する試み

が最大限なされている。残された測量野帳の記録から、測量の方位角は三六〇度が一二〇分割された値が採用されており、「小丸」と呼ばれる方位磁石盤の利用が想定される。これは小丸使用の最も古い記録とされ、地域には浸透していなかった新しい測量技術が利用されたことがうかがえる。おそらく、地域住民だけではなく、最新の測量技術を備えた人物が山形作製に関わったのであろう。こうした人物の任用が地域側の主体的判断であるか、幕府からの要請であるかは、判然としない。山形の作製は、相論当事者の双方立会でなされたが、地域の外部からもたらされた測量技術や測量成果は、双方の思惑の影響からある程度独立して存在しえた可能性がある。いずれにしても、結果として提出された山形は、現在でも十分に現地比定可能な精度で仕上がっており、読者である評定所側の期待に応えたものであったと思われる。

こうした裁判資料のほかに、読者側が作者側に地図作製を命じた例として相応しいものとして、江戸時代の幕府撰国絵図を挙げることができる。ここでの読者は將軍ないし幕府であり、作者は各国絵図の作製を命じられた藩（絵図元）となる。幕藩体制にあつて、国絵図作製は將軍・幕府と大名・藩との関係性を示す権威となり、またその時どきの政治課題を解決する手段ともなったことが、川村博忠¹⁵や杉本史子¹⁶をはじめとした、これまでの国絵図に関する諸研究のなかで明らかにされてきた。¹⁷これら、先学の成果に導かれつつ、本稿のテーマに沿って国絵図を再確認したい。

幕府撰国絵図は、慶長・正保・元禄・天保の四度とされるが、幕府の意向が細部にわたって統一される形で各国（絵図元）に示されたのは正保国絵図以降である。慶長国絵図は現存する図をみる限り、表現の仕様が多样であり、内容に対する幕府からの強い要求があつたようにはみえない。むしろ提出させることが優先されていたようにもみえ、地図は読者と作者との権力関係の確認ないし確立のために利用された可能性がある。こうした慶長国絵図に対し、正保国絵図では地図の内容や表現に関して全国で統一基準が設けられ、地図に対する読者の意向がより明確に作者側に要求されている。この姿勢は元禄国絵図によってさらに昇華され、規格や絵図様式の統一が達成されている。

とはいえ、あらゆる部分が完全に統一されたわけではなく、各国絵図に独自性を発揮する余地もわずかに残されていた。

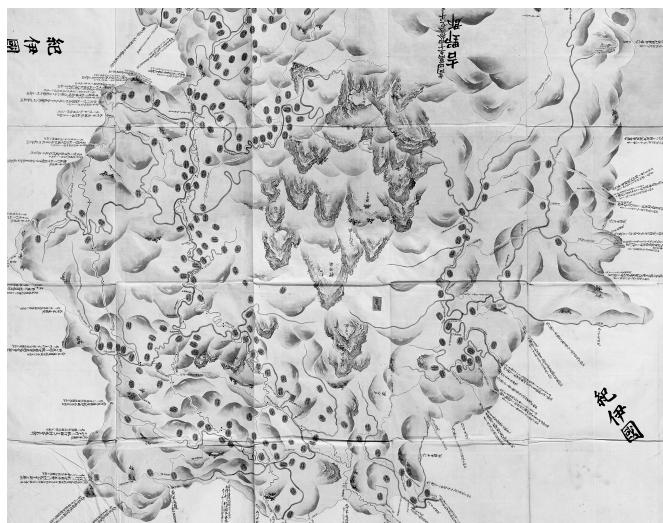


図8 大和国（元禄）（部分）

元禄15年（1702）、国立公文書館蔵

例えば各地の勝地や名跡の表現である。元禄山城国絵図では寺社の表現はかなりな程度、画一化され、記号的な描写に近づいているが、三十三間堂は少し幅広に、大仏は少し高く、吉田社は草葺様にと、若干の描き分けがなされている。また、元禄大和国絵図（図8）では、吉野では桜が花開き、大和国南部の中央には、周囲とは隔絶した険しい大峰山（系）の山々が連なっている。こうした作者側の国の特徴を表現しようとした意図を、読者側の幕府も一定程度許容し、幕府による

清書（清絵図）の作製でも採用したことがわかる。¹⁹⁾

また、天保国絵図・郷帳の作製においては、幕府がより実務的な国情把握を目指し、石高記載を表高から実高へと変更するよう要求したことが知られている。²⁰⁾ これを受け、例えば山城国絵図の場合、元禄国絵図の記載は二万四二五七石余であったものが、天保国絵図では二万三三二石余へと変化している。こうした変化は各国絵図で確認できるが、そうした中であって、島津氏が絵図元となった薩摩・大隅・琉球については、元禄国絵図と天保国絵図で石高記載に変化がない。川村は「表高をもって実高であるとする建前を貫いたものであろう」²¹⁾として、幕府の要求を巧みにかわした藩の姿勢を指摘している。本稿の議論に照らせば、こうした島津氏側の動きは「意図的にだます」ものとみなしうるものであり、読者の要求に対する作者の抵抗手段として「嘘」が選択されたこ

となる。

川村は、元禄度の郷帳・国絵図記載の石高に対する天保度の郷帳・国絵図記載の石高増加率が最も高い周防、長門両国（萩藩）についても、その実態を探っている。²² それによれば、萩藩は幕府命令に基づいて両国の実高調査を実施したが、最終的にはその数値ではなく、寛政四年（一七九二）に国目付下向の際に提示した内検高に合わせた数字を実高として報告することになった。そこには幕府に実高を知られたくないという慎重な態度に加え、幕府からの提出を急ぐ旨が知らされた際に、一村ごとの改めは不要といった申し渡しがあつたことも影響する。結局、実際に調査した石高からは七万六千石余差し引かれた数値が報告された。

最も石高増加率の高かった周防、長門であつてもこうした状況であり、川村が指摘するように、他藩においても大なり小なり作爲が加えられた数値が記載された可能性が高い。鹿児島藩のある種あからさまな「嘘」から、萩藩のような幕府から過少申告を容認されるような「嘘」まで、その内実は多様であろうが、国絵図の事例は、読者の主導するような地図が、読者と作者の関係性や、思惑が交錯していくところに成立することを強く示唆してくれる。

（四） 作者と読者の協働

〔B-3〕と分類したものは、地図作製において作者のみならず読者も関与がみられるものである。その多くは、作者と読者がともに地図に表現される土地に関わっており、両者の関係性を相互確認することが地図作製の目的となっているものである。古代や中世に多く作製された荘園図のうち、内容を確認する（承認する）意味を持つ双方の署名が確認できるものは、その典型例として位置づけることができる。²³ ここでは、事例として古代荘園図を取り上げる。

既存の古代荘園図研究の到達点を整理し、その後の基礎をつくった成果として、『日本古代荘園図』²⁴ が位置づけられることは、前稿にてすでに確認した。²⁵ その上で、前稿においては、金田章裕²⁶と三河雅弘²⁷の成果に依拠しつつ、古代荘園図は

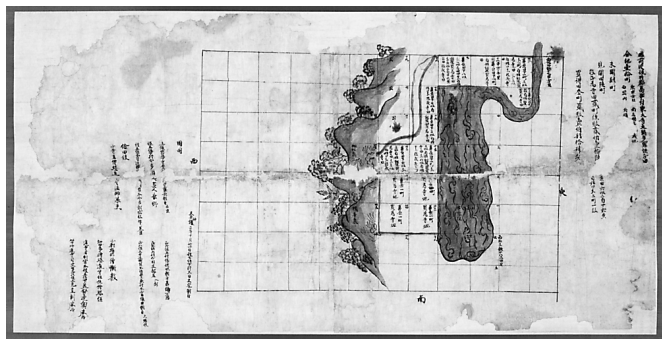


図9 越前国坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田図案（東大寺開田図）

天平神護2年（766）、奈良国立博物館蔵

出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム（https://colbase.nich.go.jp/collection_items/narahaku/894-0）

条里プラン完成・班田図整備の前後、および荘園の占定・開発の主体の違いにより、四つに分類が可能であることを示し、それぞれの特徴について言及した。土地の開発と荘園の開発、そして制度の整備といった観点からとらえたこの分類自体には一定の意味があると思われる、その点において前稿を修正する必要性は感じていないが、一方で、本稿の主題にある地図の作者と読者という視点からすれば、異なる分類もまた可能となる。こ

うした分類作業自体は、本稿の目的をやや超えるため、今後の課題としておくが、ここでは前稿で示した分類とは異なる位置づけとなる個別事例として、「越前国坂井郡高串村東大寺大修多羅供分田図案」²⁸（以下、高串村図、図9）を挙げておきたい。

高串村図は、天平神護二年（七六六）一〇月二一日の日付を持つ。同じ日付の荘園図には「越前国足羽郡箕置村開田図」と「越前国足羽郡道守村開田地図」があり、さらに同じ日付の「越前国司解」が知られている。この国司解は、東大寺の要請によって越前国内の東大寺田を改めて確認し、所有権の変更手続きなどをした結果が報告されたもので、現存三図が「越前国司解」と密接に関係したものであったことは疑いない。

これに関して、櫛木謙周は荘園図の作者についての重要な指摘をしている。²⁹ それによれば、東大寺・造東大寺司側が作製主体となり、国司が領有を確認する意味で署名した他の時期の越前国の荘園図や隣国の越中国の荘園図とは異なり、天平神護二年一〇月二一日の日付をもつ三図については、国司が作製主体となっており、国司の署名の後に検田使が署名したものと

なっている。すなわち、他の越前・越中国の古代荘園図は、東大寺側が作者、国司側が読者という構図であるのに対し、高串村図を含む三図は作者と読者の位置が逆転する。³⁰⁾

こうした違いがあるとはいえ、これらの荘園図がどちらも双方の了承・確認を経て完成していることには変わらない。

地図の内容は双方が納得したものであり、双方にとって「正しい」ものである。この限りにおいて、高串村図に「嘘」は含まれないことになる。ひとまず、このように位置づけられるが、ここに地図におけるもう一つの「嘘」をつく相手が登場することになる。それは地図の表現対象たる大地である。

これまでも大地は登場しており、例えば仏教系世界図においては地球全体が、仏教思想における南瞻部洲としてとらえられ、表現されていた。ただし、まさに南瞻部洲は思想的観念が形成した経験世界の外部に位置する存在であり、先述の通り、作図は「観念と仮想」のなかに「経験と現実」を位置づける営みであったが故に、実際の大地との一致度はあまり問題にならなかった。しかし、小地域を対象とする場合、大地は可視的に理解可能な範囲にある。こうした経験世界の内部の描写においては、「観念と仮想」で想像する要素は乏しくなる。目黒山形作製時の測量や山形造作はこの「経験と現実」の世界を幾何学的に再現しようとした営みに他ならない。その結果、当該地を「観念と仮想」でしか想起しえなかった江戸の評定所に、「経験と現実」をまさに仮想的に提供しえたのである。

目黒山形の読者は現地を知らない評定所役人であったが、注意せねばならないのは、作者と読者の双方が地図に描かれる現地を理解している場合は、地図上に大地を忠実に表現せずとも相互了解が可能となる点がある、という点である。高串村図の場合は、まさにこうした状況にあった。高串村図では焦点化された土地が、条里プランと文字とを利用した土地利用ないし土地領有の幾何学的表現と、風景の絵画的描写の二つの位相を組み合わせる形で表現されている。³¹⁾ 通常、異なる位相でとらえられた空間は、スムーズに重なり合うことはなく、一つのキャンバスの上に現出させる共通の標点ないし変換コードを組み入れることが必要となる。古代荘園図の場合、双方をゆがめる変換ではなく、条里プランを中心に据

えた変換がなされることが多い。³³ こうした変換方法が、当時の作者と読者の共有された知であったととらえてよい。

正方形の方格で条里プランが表現される高串村図も、この範疇に入る。結果として、串方江と表現された池の西側と北側は条里プランに制約された不自然に直線的な湖岸線に表現される。また、西側の「山」は水平的な視線で眺めた山並みを平面に展開したような絵画的表現となっている。こうした水平的な山並みと平面的な条里プランとの接続にとって重要なのは、土地利用の異なる平地部と山地部の境界、山裾にあたる部分となる。³⁴ 基本的に山地範囲は彩色によって示されるが、彩色範囲を条里プランに沿ったものとするので、土地利用の違う二つの地形を区分し、彩色では不自然になりそうな北部については、文字で「岡」と表記することで、二つの位相を接続させている。

すなわち、実態として条里プランと明確に一致して水域や山地があつたのではなく、まさにプラン上ではこのようにとらえているという表現であり、現実の景観では判断しえない世界が、地図上の表現を通じて浮かび上がっているのである。ここに「地」と「図」の逆転を見出すことも可能であり、実態であるはずの大地を基準とした把握ではなく、条里プランを基準とした世界が土地把握・土地領有の基準となるのが、高串村図の世界である。

実態としての大地に過度な重点が置かれていないことを示すのは、山並みの表現にも表れる。高串村図の表現範囲については、金田によって比定案が出され、³⁵ 櫛木もその案を追認している。³⁶ これによれば、高串村は現在の福井市白方町から坂井市三国町米納津にかけての付近あたり、九頭竜川の河口付近に位置する。西側には日本海と九頭竜川との影響で形成された長さ一〇キロメートルに及ぶ砂丘（三里浜）が存在しており、これが高串村図に表現された「山並み」の正体である。櫛木は「砂丘は全体にわたり削られており、絵図の描写の面影はあまり残っていない」と評価するが、海岸砂丘が高串村図に表現されるような独立的な稜線を持つ山の連なりのようにになるとは想定しがたく、そもその描写が実態とはかなり異なるものであったと評価したほうがよい。³⁸ 少なくとも、高串村図の絵画的表現については、現地を精緻かつ正確に表現しようという強い意思は看取しえない。

改めて確認すれば、高串村図には作者である国司側と、読者である東大寺側による内容の相互了解がなされていた。この了解には、条里プランと絵画表現とを重ね合わせる変換に伴って、現地の景観とはズレが生じた地図表現となっていることへの了解も暗黙的に含まれていたことになる。その上で、手続き上においては、現地の景観というよりもむしろ、地図に描かれた世界を共通の土俵として、土地領有の相互承認をおこなったのである。一見すると実態とは大きくずれた表現の高串村図だが、作者と読者の双方にとって「意図的にだます」ような内容ではなかったということになる。

① 精華町寄託（森島國男家文書）。本図については、別に資料解説を記したことがあり、本稿の内容の一部はそれに依る。上杉和央「山城国綴喜郡大住村絵図」、京田辺市史編さん委員会編『京田辺市史 資料編第五巻』（京田辺市、二〇二四年）。

② ただし、前稿で指摘したように、享和二年（一八〇二）時の洪水被害を記した図である可能性がある。前掲第三章① 上杉二〇二四年。

③ a 室賀信夫・海野一隆「日本に行われた仏教系世界図について」、地理学史研究会編『地理学史研究Ⅰ』（柳原書店、一九五七年）、b 荻野三七彦「日本古文書学と中世文化史」（吉川弘文館、一九九五年）（初出は一九七八年）、c ジャメンツ・マイケル「法隆寺蔵『五天竺図』についての覚え書き」、藤井讓二・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』（京都大学学術出版会、二〇〇七年）、d 谷口耕生「五天竺図と中世南都の仏教世界観」、『東アジア仏教美術における聖地表象の諸形態』（平成二五—二八年度科学研究費補助金基盤（B）研究成果報告書）（二〇一六年）。

④ 横内裕人「法隆寺所蔵『五天竺図』にみる仏教的世界認識の更新—仮想現実としての補陀落山の登場—」、吉川真司・倉本一宏編『日本の時空間の形成』（思文閣出版、二〇一七年）。

⑤ 前掲第三章④ 横内二〇一七年、三九八頁および四〇三頁。

⑥ 寺院内で「五天竺図」がどのように利用されたのかについて、ジャメンツは一つの可能性として、絵解きを通じた利用に言及している。実際、昭和初期において、「五天竺図」は法隆寺内で絵解きされていたのだという。前掲第三章③c ジャメンツ二〇〇七年、九九頁。なお、筆者も、京都市東山区内の松原通沿いにある某寺において、近世に刊行された仏教系世界図が絵解きされている状況を確認したことがある。こうした点を無批判に遡らせることはできないが、ジャメンツの説は、可能性として十分に評価できるものである。

⑦ 前掲第三章④ 横内二〇一七年。

⑧ 「古図」とは、作製時期に比して地図に表現される時期が過去に遡る地図の総称である。上杉和央「古図のある風景」、脇田修監修、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』（創元社、二〇一五年）。

⑨ a 馬部隆弘「由緒・偽文書と地域社会—北河内を中心に—」（勉誠出版、二〇一九年）、b 馬部隆弘『椿井文書—日本最大級の偽文書—』（中央公論新社、二〇二〇年）。

⑩ 前掲第三章⑨b 馬部二〇二〇年、六三—六五頁。

⑪ 黒田日出男による上杉本洛中洛外図屏風の解釈は、注文主と絵師の意図を読み取った研究の代表例である。黒田日出男『謎解き洛中洛外図』（岩波書店、二〇〇三年）。

- ⑫ 宮本春樹「山論の経過と採決」、松野町教育委員会『松野町文化的景観調査報告書―目黒の農山村景観―』（松野町教育委員会、二〇二一年）。
- ⑬ 鳴海邦匡『近世日本の地図と測量』（九州大学出版会、二〇〇七年）。
- ⑭ 前掲第三章⑫ 宮本二〇二一年。
- ⑮ a 川村博忠『江戸幕府撰国絵図の研究』（古今書院、一九八四年）、b 川村博忠『国絵図』（吉川弘文館、一九九〇年）、c 川村博忠『江戸幕府の日本地図―国絵図・城絵図・日本図―』（吉川弘文館、二〇一〇年）、d 川村博忠『江戸幕府撰日本総図の研究』（古今書院、二〇一三年）。
- ⑯ a 杉本史子『領域支配の展開と近世』（山川出版社、一九九九年）、b 杉本史子『裁許』と近世社会―口頭・文字・絵図―、黒田日出男・メアリ・エリザベス・ベリ・杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』（東京大学出版会、二〇〇一年）、c 杉本史子『近世政治空間論―裁き・公・日本―』（東京大学出版会、二〇一八年）、d 杉本史子『絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会―』（名古屋大学出版会、二〇二二年）。
- ⑰ 各国の国絵図に関する到達点がまとめられたものとして、次の書がある。a 国絵図研究会編『国絵図の世界』（柏書房、二〇〇五年）。b 小野寺淳・平井松午編『国絵図読解事典』（創元社、二〇二二年）。
- ⑱ 国立公文書館蔵「山城国（元禄）」。なお、同館所蔵の国絵図については、国立公文書館デジタルアーカイブで画像閲覧が可能である。
<https://www.digitalarchives.go.jp/>（二〇二四年九月一六日最終閲覧）。
- ⑲ なお、こうした特徴は天保国絵図でも確認でき、国によっては寺社や勝地の特徴を明確に表現しているものもある。上杉和央『国絵図のなかの世界遺産』、小野寺淳・平井松午編『国絵図読解事典』（創元社、二〇二一年）。
- ⑳ 国絵図には村高が各村の村形に、郡高と総石高が畠紙に記載される。その内容は、同時に提出を命じられた郷帳に準じている。
- ㉑ 前掲第三章⑮ a 川村一九八四年、二六四頁。
- ㉒ 前掲第三章⑮ a 川村一九八四年。
- ㉓ もちろん、近世の土地相論でも双方立会による地図作製はなされた。内政処理のなかで作られた地図などは（B-1-3）の典型となる。（B-2）の事例でみた目黒山形や立会絵図も、相論の二村に注目すれば（B-3）の事例として説明しうる。
- ㉔ 金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』（東京大学出版会、一九九六年）。
- ㉕ 上杉和央『古代荘園図の広がり』、吉村武彦・吉川真司・川尻秋生編『シリーズ古代史をひらくⅡ 古代荘園―奈良時代以前からの歴史を探る―』（岩波書店、二〇二四年）。
- ㉖ a 金田章裕『八・九世紀の条里プランとその特性』、金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』（東京大学出版会、一九九六年）、b 金田章裕『古代荘園図と景観』（東京大学出版会、一九九八年）。
- ㉗ 三河雅弘『古代寺院の土地領有と荘園図』（同成社、二〇一七年）。
- ㉘ 奈良国立博物館蔵。
- ㉙ 榊木謙周『越前c 越前国坂井郡高申村東大寺大修多羅供分田地図』、金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』（東京大学出版会、一九九六年）。
- ㉚ なお、ここという作者と読者は土地領有に関わる主体での区分であり、実際に地図を描出した作製者ではない点は留意したい。実際の作製には筆師が関わった古代荘園図と、そうではない古代荘園図があり、後者は集成図的な側面があり、その際にミスが起きた図があることが

指摘されている。金田章裕「班田図・古代荘園図と等師」、『条里制・古代都市研究』三九、二〇二四年。

③1 前掲第一章⑧ 応地二〇〇七年。

③2 古代荘園図では、こうした二つの表現法のいずれかないし両方が使用されるが、条里プランによる表現がより重視され、絵画的な表現は従属的である。金田章裕「古代荘園図の表現法とその特性」、金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』（東京大学出版会、一九九六年）。

③3 条里プランが正方形区画ではなく、長方形区画として描かれる古代荘園図もあり、その場合は地図作製時に条里プランの縦横比を変更する変換コードも利用されていることになる。

第Ⅳ章 不特定多数の読者と地図

(一) 作者から自由な／不自由な地図

最後に、図1のCで示したパターンないし場面について考えたい。すでに確認したように、作者と読者②は、関係を直接的に取り結ぶことはない。作者の側からみれば、地図は（特定の人物ないし集団ではなく）「不特定多数」に向けて作製したものの、もしくは特定の人物ないし集団に作製したが、その後、想定していない別の人物ないし集団によって利用されたものとなる。そのため、作者は読者を具体的に思い浮かべることは難しく、また逆に読者も作者に対する認識はなく、読者が対話するのは、眼前にある地図のみである。前者の場合、作者がもし「嘘」の地図を作るとすれば、だます相手は世間ないし「社会」といった漠然としたものとなる。

③4 もう一つ、山の稜線や植生などが田地等の位置比定の目印として利用される場合は、その表現が重要となる。高串村の場合、松と思しき樹木が多いなか、針葉樹が一本だけ表現されており、何らかの意味があった可能性がある。また、山谷の中央部には岩体もみえる。

③5 金田章裕『古代日本の景観』（吉川弘文館、一九九三年）。

③6 前掲第三章②⑨ 櫛木一九九六年。

③7 前掲第三章②⑨ 櫛木一九九六年、四三一—四三三頁。

③8 上杉和央「古代荘園図の山を「推す」、吉村武彦、吉川真司・川尻秋生編『シリーズ古代史をひらくⅡ 古代荘園—奈良時代以前からの歴史を探る—』（岩波書店、二〇二四年）。

作者が後景に退き、地図と読者との関係が前面に表れるのは、例えば、作者名が掲出されないような出版図に典型的である。出版図は近世に登場したが、地図の板元名はあっても、作者が明示されないものは多い。もちろん、板元が作者とみられる場合も往々にしてある。例えば、貞享四年（一六八七）初版の『新撰増補大坂大絵図』では、板元である「御絵図所林氏吉永」が、既存の図は小さく情報が少ないため大判にして内容を吟味し、さらに貞享三年（一六八六）の普請による変化を「悉改メ令開板者也」として、これまでの図に対する板元の工夫した点を明記している。^①この図に記載される大坂城代は内藤大和守（重頼）だが、同年一〇月に京都所司代に転出する。これに関し、同じ刊記ながら、内藤に代わり大坂城代となった松平因幡守（光重）の名を補刻した図も確認されており、変化に応じた修正を板元がおこなっていたことがわかり、確かに板元が作者の役割を果たしていたことがうかがえる。しかし、こうした場合、板株の売買により、板元が変更されると、作者まで変更されることになってしまう。^③

一方で、地図に作者が明示される出版図もある。^④第Ⅱ章ですでに触れた『改正日本輿地路程全図』もその一つで、長久保赤水（玄珠）の名前が明記されている。地図史において赤水図（赤水日本図）と呼ぶのも、作者名が明記されているからに他ならない。

赤水図は江戸時代後期を代表する出版日本図だが、江戸時代中期を代表する『日本海山潮陸図』も、作者である石川流宣の名前を冠して流宣図（流宣日本図）と総称されている。流宣図は、現時点で四二回の改版が確認されるまさにベストセラーとなったが、^⑤その一因に「名前買い」の読者が一定数いた可能性を指摘したことがある。^⑥というのも、石川流宣は菱川師宣の弟子にあたる浮世絵師で、かつ上方の井原西鶴にわずかに遅れつつも、江戸で最初に浮世草子を作った人物であり、当時の文化において流行作家・絵師と言える人物なのである。流宣図が出版日本図の歴史の中で初めて作者が明記された地図であることを勘案すると、石川流宣の名前を出すことが販売促進につながるという思惑が板元・相模屋太兵衛の側にあったとしてもおかしくはないだろう。

流宣図は、流宣の死後も改版がなされている。内容の変更・改訂は板元がおこなったのだろうが、その板元も何度かわる。読者からしてみれば、作者名は付されるものの、その実、それ以外の者の手が加わる作品となっている。現在のような著作権保護があるわけはなく、「だます」意図があつたかどうかは不明だが、生前のごとく「流宣」の名前で地図を売ろうとしていたのであれば、そこに確かに何らかの意図は含まれていたことになる。

(二) 「古図」と読者

ここまで出版図を事例としたが、手描き図においても、多くの写しが作られた地図は「不特定多数」の読者を獲得したものとよく、そうしたなかにも作者名のない図を確認することができる。個別の地図の経緯については多様であり、作者名不在の理由をまとめることは不可能だが、なかには意図的に作者名が隠されたとみられる図もある。そのなかには「古図」と総称しうる図が含まれる。すでに触れたように椿井政隆による図群も「古図」であり、原図作者名は意図的に隠されていた。椿井文書の図についても模写が確認されるためCに含みうる側面もあるが、「不特定多数」を意識した作製であつたとするには、政隆の特定の地域に対する意欲が前面に表れすぎるようにも思われる。

「古図」のなかで、もっと端的に「不特定多数」の読者を相手として作製された手描き図として、浪速古図と総称される一群を挙げておきたい。以前、論じたように、浪速古図はいくつかのタイプに分けられるが、これらのうち、応永二十四年（一四一七）や康正二年（一四五六）といった時期に写されたとされる由緒が付された図群には、「河州雲荃寺什物」といった本来の所蔵元（とされる場所）が記載される。そして、そうした由緒のある原図が宝暦年間や安永年間に模写（もしくはそれ以降に再模写）された体裁をとるのである。

図10はこうした浪速古図の一種で、図内に「康正二歳丙子六月写 河州雲荃寺什物也」「右浪花古図、宝暦六丙子年六月挽河内国雲荃寺所伝之本以所贍写之図、今茲嘉永五壬子三月復写畢。康正丙子至今三百九十八年矣」とあり、宝暦六年

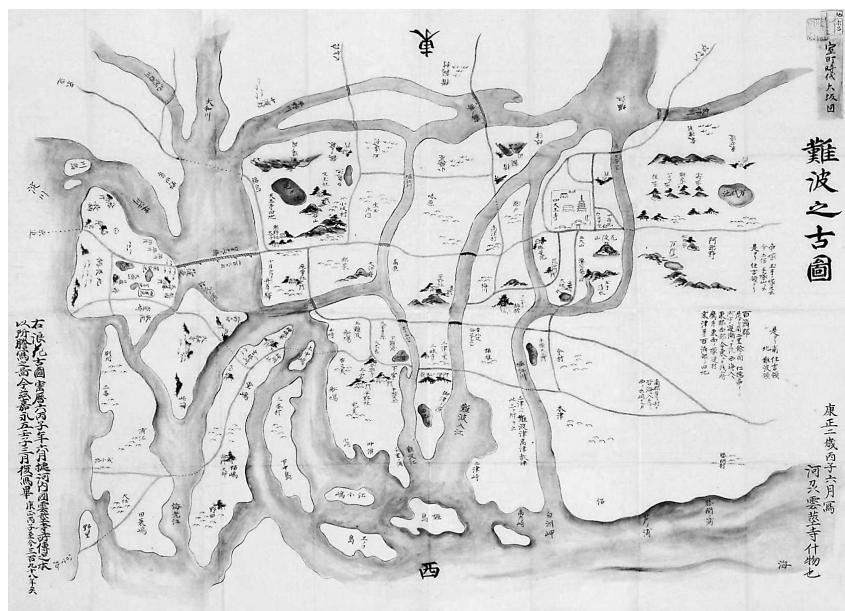


図10 難波之古図

嘉永5年（1852）、早稲田大学図書館蔵

（一七五六）の図を嘉永五年（一八五二）に再模写したものである。浪速古図については、現時点で宝暦年間より遡る図はなく、一八世紀前期～中期頃に登場したとみられる。

同じく「古図」の一群に属す越後国を表現した越後古図と総称される地図群については、堀健彦による詳細な検討がなされているが、現時点では文政年間頃より遡る図はなく、一九世紀前半以降に盛んに作製・模写がなされて流通されたと評価されている^⑧。その他の「古図」に関する網羅的な研究は確認できないが、管見の限り、その他の地域の「古図」も、多くの模写が確認できるようになるのは、一八世紀から一九世紀にかけてであり、それ以前の動きは乏しい。過去の由緒を携え、過去を「正しく」表現していることをアピールする「古図」の隆盛が一八世紀以降にみられるというのは、実証的な態度、科学的な態度が社会的に進展し、地図を評価する指標に「正しさ」^⑨がもてはやされるようになった時期に照らしてもふさわしく、「古図」が社会的産物であることを強く示唆する。

浪速古図の場合、模写図(という体裁の新たに作製した地図)として登場した後、知識人層を中心に貸借や模写などを通じて急速に広まっていた。本居宣長や荒木田久老といった国学者たちが浪速古図を有益な史料として位置づけ、『古事記伝』や『難波旧地考』といった彼らの自書にて引用しているほか、名所図会シリーズの作者として著名な秋里籬島は、『撰津名所図会』のなかで「難波往古の正しき図」として浪速古図を紹介している。さらには手描き図の内容に依拠してアレنجされた出版図『浪華往古図』^⑩も刊行されており、一定の広がりを持って受容されていた。

浪速古図の内容については、先学が説くように、明らかな誤りが含まれており、由緒をふくめて「嘘」の多い地図である。しかしながら、一八世紀中期の段階ですでに森幸安が浪速古図の内容に不備を指摘したように、何も近代になってからその「嘘」が発見されたわけではない。「不特定多数」であるが故に、その内容に賛意を示す者もいれば、批判的見解を持つ者もいるなど、地図と読者との間には多様な関係性のあり方が表れることになる。

① 貞享四年版『新撰増補大坂大絵図』(初版)は、大阪府立中之島図書館、三井文庫に所蔵される。本図を含む大坂図については下記を参照のこと。脇田修監修、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』(創元社、二〇一五年)。

② 大阪歴史博物館所蔵図が該当する。なお、貞享四年『新撰増補大坂大絵図』に関する下記の解説において、内藤大和守の大坂城代在任期間(貞享二年九月二七日～貞享四年一〇月一三日)に誤まりがあった点、お詫びしたい。上杉和央「『貞享図1-1・1・2』新撰増補大坂大絵図(外題)」、脇田修監修、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』(創元社、二〇一五年)。

③ 実際、『新撰増補大坂大絵図』は、その後、板株の移動が確認できる。上杉和央「『貞享図1』摂州大阪旧地図全(外題)」、脇田修監修、小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』(創元社、二〇一五

年)。

④ こうした刊記の記載は、板株や本屋仲間の管理統制に関わる側面もあり、天保期に本屋仲間が解散すると、いわゆる海賊版の刊行が増加した。

⑤ 海田俊一『流言図と赤水図―江戸時代のベストセラー日本地図―』(三恵社、二〇一七年)。

⑥ 上杉和央『地図から読む江戸時代』(筑摩書房、二〇一五年)。

⑦ 上杉和央「近世における浪速古図の作製と受容」、『史料』八五(一)、二〇〇二年。

⑧ a 堀健彦「明治中期の新潟県郷土雑誌と越後古図」、『資料学研究』五、二〇〇八年、b 堀健彦編『平安越後古図集成』(新潟大学「大域的文化システムの再構築に関する資料学的研究」、二〇〇八年)。

⑨ 前掲第二章⑦b 上杉二〇一〇年。前掲第三章⑧ 上杉二〇一五年。

⑩ 宝暦六年（一七五六）に画工は月岡丹下、板元は文英堂・西山堂・環書堂・淳浪亭によって刊行された。

⑪ 代表的な指摘として次の二点を挙げておく。a 吉田東伍「高津宮址

附難波堀江」、「歴史地理」二（二）、一九〇〇年、b 喜田貞吉「難波沿革図の偽作」、「歴史地理」二（七）、一九〇〇年。

⑫ 前掲第四章⑦ 上杉二〇〇二年。

おわりに

以上、「嘘」という視点を意識しつつ、いくつかのパターンないし場面に分けて作者・地図・読者の関係についての事例を検討した。読者の想定がされないAの場合、「嘘」は成立しない。Bとした特定の読者を想定した地図作製においては、作者と読者の関係性によって「嘘」が含まれる地図が作られる可能性が認められた。また、大地の描写としては齟齬があるものの、作者と読者がその内容に相互了承するような場合も確認できた。Cとした不特定多数の読者に向けては、世間や「社会」に向けて「嘘」をつく場合が想定されるほか、一部の「古図」のように、意図的に作者を隠すことで内容に信ぴょう性を与えようとする「嘘」があることを指摘した。

ただし、確認しておけば、実際のところ、作者が特定／不特定の読者を「意図的にだます」内容を含む古地図が大量にあるわけではない。意図していないが結果的に誤った情報が含まれた地図であったり、大地の表現としては誤っていても、作者と読者の間で内容が合意されている地図であったりと、「嘘」と判定することは困難な地図の方が多い。「嘘」は作者と読者の関係性のなかで成立するのであり、読者が、作者の想定した読者なのか、想定を超えた読者なのかによっても、地図の受け取られ方は異なる。最後にみた「古図」は、わざと異なる時間軸に作られたように細工し、同時代の作品ではないとすることで、歴史的「正しさ」をまとうようにしていた。「嘘」の定義に照らせば、「古図」の「嘘」とは、地図に表現された歴史地理的内容もさることながら、むしろ作者と読者との時間・空間の距離をわざとあける演出を施した点にこそ「意図的にだます」態度が認められることになる。

本稿では、地図の作製された時代や地図に表現される空間スケールを固定することなく、広く見渡すことを意識しながら事例を選択した。そうすることで、設定したパターンや場面が一定度の汎用性をもって応用可能であることを確認していったつもりである。もっとも、網羅的な議論となっておらず、また事例として掲げたそれぞれについての検討も十分ではないため、今後、議論の幅広さと奥行きの両方を追究する必要がある。そうした課題は十分に理解しているつもりだが、それでも本稿にわずかでも意義を認めるとすれば、これまでの地図史の議論の多くが作者と地図の関係に偏り、作者がどのような読者を念頭に、どのような内容の意図をもって地図作製に当たったのか、といった点についての関心はそれほど高いものではなかったことに意識を向け、「嘘」という刺激的な視点に導かれつつ、作者と読者、そして地図との関係を焦点化させる必要性を指摘したことにある。

〔謝辞〕 本稿の着想にあたっては、例会時の質疑や討論の内容が大いに参考となった。参加いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。また、図版の掲載に当たり、次の組織・機関から多大なる協力を得た。末尾ながら、感謝申し上げます。国立公文書館・精華町教育委員会・高萩市歴史資料館・奈良国立博物館・松野町教育委員会・本居宣長記念館・早稲田大学図書館・和束町史編さん室（五〇音順）。

（京都府立大学文学部准教授）

The History of Maps from the Perspective of “Lies”

by

UESUGI Kazuhiro

The claim that “maps are liars” falls into the category of common sense in the history of cartography. However, even now, when the depiction of the history of cartography is seen as having the goal of overcoming the developmental historical perspective and aiming for “correctness,” there still has been no attempt to discuss “lies” found in maps. Therefore, in order to try to grasp the history of maps from the perspective of “lies,” it is first necessary to think about what we mean by “lies.”

A “lie” is not just an inaccuracy, but something that contains content that is “intentionally deceiving.” It is essential to be conscious of the existence of both the deceived and the deceiver when one finds “lies” in historical sources. Drawing on these characteristics, it can be pointed out that most of the research on the history of maps to date has tended to focus only on the relationship between the map and its creator, and has not considered maps in terms of the relationship between the creator and the map reader. Therefore, the purpose of this paper is to discuss the possibility of map history focusing on the relationship between the creator and the reader.

The relationship between the creator and the reader of a map can be roughly divided into three categories: category A can be visualized as a pattern or schema in which the author creates a map for himself (and therefore a link between the author and the reader cannot be established); category B can be visualized as a pattern or schema in which the relationship established between the creator and the reader is that which the creator had intended; and category C can be visualized as a pattern or schema in which the creator produces a map for an “unspecified number of readers.” In this paper, I have determined the characteristics of each pattern by presenting examples, and examined the space for “lies” in each of them. I have tried to select examples on a wide variety of scales and from as diverse time periods as possible, and I have confirmed that an analytical perspective that focuses on the relationship between creators,

readers, and maps is applicable to the entire history of cartography.

Since in category A the creator and the map reader are one and the same, it is impossible to create a map whose “lies” deceive the reader. Among the maps created and used in the category B relationship, some maps depict the content that the creator wanted to assert to a specific reader. They may use emphasis, exaggerations, and sometimes intentional distortion of the content. On the other hand, there are cases where the creator makes a map according to a reader’s request, and it is necessary to be aware that such a map does not unilaterally reflect the author’s intention alone. In some cases, such as maps of ancient estates in Japan, the reader signed the created map to indicate acceptance and approval. In this case, it can be said that the creator and the reader produced the map in collaboration. As a matter of fact, when the contents of such a map are compared with the local terrain, the map is inaccurate in some cases. However, the field of mutual recognition between the two sides resides in the map, not on the actual ground.

The “old maps” from Category C that were made around the 18th century were deliberately crafted to make them appear to have been made in earlier times, and in claiming that they were not contemporary works, they were clothed in historical “correctness.” In light of the definition of a “lie,” the “lies” found in “old maps” are not just found in the historical and geographical content expressed on the map, but rather in the fact that the creator and the map reader deliberately worked to create gaps in time and space that were intentionally deceptive. However, since there is an unspecified number of map readers, one can be certain that some readers believed the contents of such “old maps” and others denounced them as “lies.” The sense of distance between the creator and the reader that is built on “lies” is not constant in all cases.

Keywords; Map History, Creator, Reader, Lie